蚕の語源について

東京農工大学農学部蚕学研究室
准教授　横山　岳

新年を迎えて、先ず「蚕」の語源について

小学生によく「蚕はなんで“カイコ”っていうの？」と尋ねられる。「蚕」の語源は何か。もともと「蚕」は“コ (ko)”と発音していた。そして、「飼う蚕」“カウ (kau) コ（ko)”が訛(なま)って“カイコ (kaiko)”と呼ばれるようになったらしい（絹Ｉ／伊藤智夫)。

「蚕」は今でも“コ”と発音することがある。農家で飼われている普通の模様の蚕(図１）を「形蚕」“カタコ (kata ko)”、斑紋の無い蚕（図２）を「姫蚕」“ヒメ コ (hime ko)”と呼んでいる。蚕のことを「お蚕様」“オコサマ (o ko sama)”と呼ぶ農家もある。

昔々、720(養老 4) 年に書かれた日本書記に次のような記述がある（日本文学電子図書館 Hp より)。

「雄略天皇六年（壬寅四六二）三月丁亥（七)」三月辛巳朔丁亥。天皇欲使后妃親桑以勧蚕事。爰命蜾蠃〈蜾蠃。人名也。此云須我屡。〉聚国内蚕。於是蜾蠃誤聚嬰児、奉献天皇。天皇大咲。賜嬰児於蜾蠃曰。汝宜自養。蜾蠃即養嬰児於宮墻下。仍賜姓為少子部連。

（現代語訳）

雄略天皇は皇后に養蚕を勧めようと思い、家臣のスガルに命じて国内の蚕（コ）を集めるように指示した。しかしスガルは間違えて児（コ）を集め、天皇に献上した。天皇は笑って、子供をスガルに養わせ、スガルに少子部連(ちいさこべのむらじ)の姓を賜ったという。

このことから古代の日本語では「蚕」と

図１：形蚕(かたこ)：斑紋が有る蚕

図２：姫蚕(ひめこ)：斑紋が無い蚕

「児（子）」の発音が同じ“コ（ko）”であったことが分かる。雄略天皇は中国の歴史書の「宋書」に「倭（わ）の五王」の中の「倭王武（ぶ）」とされるヤマト王権の初期の天皇と言われており、5世紀頃であろうか。ちなみに埼玉県行田（ぎょうだ）市の稲荷山（いなりやま）古墳から出土した国宝「金錯銘鉄剣（きんさくめいてつけん）」に金の文字で「獲加多支鹵（わかたける）大王」と記されているのが雄略天皇ではないかとのこと。

次に「飼う蚕」の語源

次に「飼う蚕」と言うようになったのはいつか？　8世紀中頃（奈良時代）に成立した万葉集には4千5百首もの歌があり、その中にいくつかの桑・蚕・糸・織などを詠った歌がある。山口大学の吉村誠研究室に万葉集のデータベースがあり、そこで調べてみると、

「桑」に関する和歌：3首
「蚕」に関する和歌：3首
「繭」に関する和歌：4首
「糸」に関する和歌：9首
「絹」に関する和歌：5首
「織」に関する和歌：22首
「綿」に関する和歌：38首
「衣」に関する和歌：180首以上

歌聖と呼ばれ、万葉集の篇者の一人である柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）が嬉しいことに蚕の歌を1首詠んでいる。

足常　母養子　眉隠　隠在妹　見依鴨

（巻11-2495）

たらつねの　母が養ふ蚕の　繭隠り
隠れる妹を　見むよしもがも

たらつねの　ははがかふこの　まよごもり
こもれるいもを　みむよしもがも

「養う蚕」を“カフ コ (kau ko)”と発音している。「飼う」ではく「養う」を使っているのは何故かと、同僚の歴史学の高橋美貴准教授に尋ねたところ、母の子どもと母の蚕をかけた歌なので、あえて「養」という漢字を使って、それを「かう」と読ませているのではないか。また、もちろん、「飼」の字が正しいわけだが、言葉遊びの粋さを追求すると、こんな感じになるのではないか、と教えていただいた。

ちなみにあと2首は

作者不明
乳根之母我養蚕乃眉隠馬聲蜂音石花蜘ろ荒鹿異母二不相而（巻12-2991）

たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠り
いぶせもあるか妹に逢はずして

これは柿本人麻呂の歌によく似ている。私の勝手な推測だが、柿本人麻呂はこの歌をみて、詠み人知らずの歌だが添削すればもっと良くなる、または自分だったらこう詠むと作り変えたのではなかろうか。

作者不明

荒玉之年者来去而玉梓之使之不来者霞立長春日乎天地丹思足椅帶乳根笑母之養蚕之眉隠氣衝渡吾戀心中人丹言物西不有者松根松事遠天傳日之闇者白木綿之吾衣袖裳通手沾沼（巻 13-3258）

あらたまの年は来ゆきて玉梓の使の来ねば霞立つ長き春日を天地に思ひ足らはしたらちねの母が飼ふ蚕の繭隠り息づきわたり我が恋ふる心のうちを人に言ふものにしあらねば　松が根の待つこと遠み天伝ふ日の暮れぬれば白栲の我が衣手も通りて濡れぬ

いずれの３首も「飼う蚕」“カウコ（kau ko)”と呼ばれている。山口大のデータベースで「蚕」の検索で引っかかってこないが、次の歌も「蚕」ではないかとも言われている。

作者不明

尓比牟路能 許騰伎尓伊多礼婆 波太須酒伎 穂尓弖之伎美我 見延奴己能許呂（巻 14-3506）

新室のこどきに至ればはだすすき穂に出し君が見えぬこのころ

「許騰伎（こどき）」が「蚕時」ではないかとの説である。「蚕時」とは何時だろうか？給桑の時刻のことだろうか？　または蚕期のことだろうか？　ともあれ、蚕を自由に孵化させることができなかった時代にススキの穂が出た頃、晩秋に養蚕とは少々考え難いが。万葉集の歌は発音と漢字の意味が合っていないので、「コ」の発音を持つ歌を探すともっと蚕に関する歌が見つかるのかもしれない。

では「飼う蚕」“カウコ (kau ko)”から「蚕」“カイコ (kaiko)”になったのはいつ頃だろうか。平安時代に書かれたと言われている日本最古の本草書（薬物辞典）「本草和名（ほんぞうわみょう）」では「加比古」と書かれている。「加比古」は“カヒコ (kaiko)”の発音である。「比」は現在“ひ”だが、昔の発音は“イ (i)”だそうだ。平安時代には“カウコ”が訛って“カイコ (kaiko)”と発音されるようになったようだ（もっと古い記録があれば是非お教えください)。「本草和名」は国立国会図書館デジタルコレクションで web 上で読むことができる。

薬の本に載っている蚕

薬の本に蚕が載っているということは、蚕を何かの薬に使っていたということである。２か所、「加比古（蚕)」が載っている。

その一つが「蚕沙（さんさ）」であり、「加比古乃久曽」と書いてある。これはその発音通り「蚕の糞」だろう。薬効は胃が治るとか。蚕糞は蚕が桑の葉を細かく砕いて呑み込み、３割ほどが吸収され、残りは固められて排泄されたもの、つまり細かい桑の葉である。「蚕糞」「桑葉」ともに現在も漢方薬として使われているらしい。桑には１－デオキシノジリマイシン (DNJ) という糖に似た物質が含まれており、血糖値の急激な上

昇を抑えることがよく知られている。血糖値を上手くコントロールできない糖尿病患者には有り難い物質である。

もう一つが「白疆蚕（はっきょう）」。白きょう病にかかった蚕のことだろう（図３）。ボーベリア菌（Beauveria bassiana）というカビに蚕が感染すると死亡し、死骸は硬くなり、白い胞子を皮膚からだすようになる。蚕を飼っているとよく見かけるものである。硬化病の一種で死骸は硬く、白い蝋燭（ろうそく）のようになる（図４）。「本草和名」では何に効くか書いていないが、現在でも漢方薬に使われている。富山大学の伝統医薬データベースによると「鎮痙（ちんけい），鎮痛（ちんつう）薬として，小児痙攣（けいれん），扁桃（へんとう）炎，頭痛，歯痛のほか，中風による言語障害，半身不随などに内服する。外用としては，湿疹，潰瘍（かいよう）などの皮膚病の瘢痕（はんこん）を消すのに用いる。」とのこと。ただし、薬理作用は未詳。

桑樹の害虫キボシカミキリが桑樹に白く硬くなっているのを時々見かけることがある（図５）。白きょう病の病原のボーベリア菌の近縁の Beauveria Brongniartii が感染したものである。この菌を使ったカミキリを駆除する生物農薬が開発され、実用化されている。同じボーベリア菌だが、カミキリだけに効き、蚕には効かないのでご安心を。

図3：白きょう病に罹り胞子に覆われた蚕

図5：ボーベリア菌に感染したキボシカミキリ

図4：白きょう病に罹り硬くなった蚕の死骸

蚕糸・絹織物に関係する神社

山形県米沢市に「白子神社」がある。712(和銅5）年に創建という古い神社である。養蚕に関わりのある神社で、かつては「白蚕神社」とも呼ばれたとか。ここでも「子」＝「蚕」である。わざわざ白い蚕の神社と呼ばれているので、「真っ白な姫蚕」のことか。昔は黄色い繭が多かったので珍しい「白い繭」が取れたことで、「白蚕ではないでしょうか」と黄色俊一東京農工大学名誉教授に伺ったところ、「薬になるから白きょう蚕の白蚕かもしれないよ」とのこと。数年前に白子神社を訪れたが、残念ながら詳細は不明であった。

各地には蚕糸・絹織物に関係する神社が多くある。行き易そうな神社をあげてみた。初詣に行かれては如何だろうか？

白子神社：山形県米沢市城北2丁目3-25
蚕養国神社：福島県会津若松市蚕養町2丁目1
織姫神社：栃木県足利市西宮町3889
白滝神社：群馬県桐生市川内町5丁目3288
咲前神社：群馬県安中市鷺宮3308
蚕霊神社：茨城県神栖市日川720
蚕影神社：茨城県つくば市神郡2056
蚕養神社：茨城県日立市川尻町2丁目2377-1
秩父神社：埼玉県秩父市番場町1-3
蚕影神社：埼玉県児玉郡神川町字二ノ宮750金鑽神社内
金色養蚕大明神：東京都台東区松が谷1-14-6池の妙音寺内
蚕影神社：東京都立川市砂川町4-1-1阿豆佐味天神社内
機守神社：東京都八王子市大谷町1019-1大善寺内
蚕影神社：長野県上田市国分1233
犬頭神社：愛知県豊川市千両町糸宅107
服織神社：愛知県豊川市足山田町滝場31
繰神社：愛知県豊川市東上町権現1
蚕の社（木嶋坐天照御魂神社）：
京都府京都市右京区太秦森ケ東町50
金刀比羅神社：京都府丹後市峰山町泉1165-2

「蚕影（山）神社」は、江戸時代に茨城県つくば市の蚕影神社から各地に分祀されたものなので、上記に書ききれないほど各地にある。明治初期の廃仏毀釈時に大きな神社に合祀され、現在では分からなくなっているものも多くある。貴方（女）の町にも気が付かれず小さな祠となってあるかもしれない。また、諏訪周辺では蚕糸業が盛んであったが、「蚕玉様」という石を信仰していたようで、蚕糸業に関する神社は意外に少ない。また、全国各地にある「倭文神社」は古い機織りの神社だそうだ。養蚕業が盛んなころはどこの神社でも養蚕のお札をいただけたようだが、現在では残念ながら会津若松市の「蚕養国神社」、つくば市の「蚕影神社」しかいただけないようである。蚕を飼うのが下手な筆者はお札を貰って神頼み。

■横山 岳（よこやま・たけし）の紹介
東京農工大学農学部
生物生産学科蚕学研究室
〒183-8509：東京都府中市幸町3-5-8
TEL：042-367-5681
FAX：042-367-5786
E-mail：ty.kaiko@cc.tuat.ac.jp
HP：http://www.tuat.ac.jp/~kaiko